

カフカの「城」に関する試論(32)：前書と後書をめぐる覚書

| | |
|-----|---|
| 著者 | 芳野 昇 |
| 雑誌名 | 日本歯科大学紀要．一般教育系 |
| 巻 | 41 |
| ページ | 1-6 |
| 発行年 | 2012-03-20 |
| URL | http://doi.org/10.14983/00000057 |

カフカの「城」に関する試論

XXXII. 前書と後書をめぐる覚書

Versuch über Franz Kafkas Schloss XXXII. Notiz um das Vorwort und das Nachwort

新潟生命歯学部 芳野 昇

Noboru YOSHINO
The Nippon Dental University, Hamaura-cho 1-8,
Niigata 951-8580, Japan

(2011 年 11 月 30 日受理)

Resümee

Seit 1976 habe ich diesen > Versuch über Franz Kafkas Schloss <reihenweise, besonders viele Notizen um jede Gestalt im Werk geschrieben; K, Hauptperson und andere meisten auftretenden Personen; Frieda, Klamm, Amalia, Gerstäcker, Olga, Barnabas, Brunswick usw. > die Schloßgeschichte <des ewigen Landvermessers ist > das Schloß < ja > zum Geschrieben-, nicht zum Gelesenwerden <, wie Kafka darüber gesagt hatte. Damals bekannte Kafka selbst; > Schreiben als Form des Gebetes < oder > diese ganze Literatur ist Ansturm gegen die Grenze <. Nun will ich diese Versuche als ein Buch zusammen in naher Zukunft veröffentlichen. Vor allem müssten wir wirklich > das Schloß < von Kafka für immer entziffern.

Schlüsselindexwörter: Themen, Notizen, Gestalten, Symbol, Grenze, entziffern

1

筆者がドイツ文学を大学での専攻に決めたのは在学3年を修了した、1965年の春であった。当時は中学そして高校時代から将来への様々な志望を抱きながら、なかなか定まらずに、一途に受験勉強に没することでもできず、結局いろんな事情から、取りあえずは地元の国立大学に滑り込む羽目になった。文系だけに入学当初から、まず解放感に浸り、それなりに自由を謳歌でき、適性なぞは二の次で、まずは寮生活やサークル活動による交友関係や社会問題への関心、時には孤独感にも苛まれ、しだいに哲学や文学へと傾注して、詩作に耽り、数冊の習作を印刷したり、小説や童話を試作したりした。多くは中途半端で、挫折せざるをえなく、意中の専攻も定まらず、3年間の無為不満の年月が過ぎてしまっていた。ともかくも当時風靡してい

たサルトルやカミュのアンガージュマン、文学と政治参加、そしてハイデggerの実存主義にかぶれていた事は確かである。とりわけ後者のハイデggerの実存思想からリルケに私淑し、その関連から中原中也、立原道造そして堀辰雄を愛読して、何よりもリルケの詩と「マルテの手記」を原文で読みたくて、不得意なドイツ語に一人熱中して、ついに転じて新潟大学人文学部文学科独文専攻の門に辿り着いたわけである。当時から独文はマイナーで、地方大学卒業後の専門を生かせる道は閉ざされていたが、若気の至りか、そんな事はお構いなしに、後の3年間の在学で自分なりのリルケ論をまとめたという意欲にだけ駆られていた時期であった。比較的勤勉に受講した学部の講義と演習、まず主任教授の石井靖夫先生によるドイツ・ロマン派の作家と作品研究とゲーテの「ヘルマンとドロテーア」

の講読、専門研究の緻密さに感銘させられ、先生はお若き時にNHKの国際局で活躍されたとのこと、先生のドイツ語の比類なき発音に感嘆させられ、作品解説の方法に毎回感心していた。筆者の語学力の無さを咎めることなく、苦学している身に温情を持って、激励の言葉をかけていただいたのは真に幸いであった。リルケ研究するなら大山定一、谷友幸、高安国世の3教授のいる京大がいいですよ、とまで非才な学生にすぎなかった筆者を買かぶってください。残念ながら2年目に日大独文学科の主任教授として転任されてしまった。助教授であった成田英夫先生からは教養演習にはカロッサの名作「美しき惑いの年」と専門演習にゲーテの「ファウスト第1部」をレクラム版で講読いただいた。いずれも当番者による輪読形式で、訳本を参考にしても原文は初心者にはかなり難解であり、苦勞させられた。特に何回も当てられた「ファウスト」はかなりの速読が課せられただけに、当番の時は大変であったが、叱咤されながらも、先生独特の風刺の効いた解説がまた痛快でもあった。先生もまた2年目の後期には岡山大学に教授で転任されてしまった。「ファウスト」講読も後半途中で斎藤保男先生に担当が代わって、学生に輪読させることなく、先生の解説で終始して、苦勞することなく読了したが、もの足りない気分がした。野本祥治先生からは比較的平易なヘッセやツヴァイクの短編の購読演習と専門の「独語学概論」を講義いただいたが、後年、教師として教える時に「概論」は随分役立つことになった。野田健一先生からは独作文演習と中高ドイツ語講読を担当いただいた。期末の中高ドイツ語の答案が満点だったらしく、先生からお褒めいただき、その後も何かと声をかけていただいたり、また1985年には日本歯科大学にご推薦いただき、公私ともにお世話になった次第である。野本先生と野田先生は後に文化勲章受賞者となられた相良守峯博士の高弟であった。

さて、肝心のリルケの論文は卒業時の半年以上をかけて取り組み、結局、>貧しき時代の詩人<「ライナー・マリア・リルケ」と題して、リルケの人生と作品をトータルな視点から論究してみた、かなり気負った総括的な小論となった。実際は星野慎一教授の研究、リルケ3部作や富士川英朗教授の訳本等多くの文献を読破してはいたし、後に直接指導いただくことになった手塚富雄先生の「ゲオルゲとリルケの研究」に影響されながらも、結局はいっさいの参考文献をあえて引

用せずに、リルケの原作のみを和訳、注解して、縦横に引用するなど、小林秀雄流の方法を意識した、挑戦的な読解を意図した卒論となった。案の定、先生方の審査結果は公表されなかったが、評価は二分して、ヘルダーリンを研究されていた守永敏夫先生は激賞されたとか、また正統な研究姿勢に欠けているなどの指摘もあり、評価は折半されて「良」の判定であった。それでも生意気盛りであって、これで自分なりにリルケは乗り越えたと豪語していたのだから、その大いなる不遜に今となっては赤面至極である。とにかく卒業までの3年間は一応リルケー辺倒で、カフカの作品はほとんど読んでいなかった。ただ直接授業でご指導いただかなかったが、新任で教養部に所属されていた佐藤信行先生と意気投合して、個人的に大いなる薫陶を受けることとなった。先生の東大での修士論文が「ドイツ表現主義の文学」で、当時カフカを研究テーマにされていたのが幸いしてか、筆者は佐藤先生の影響の下、研究テーマも後を追いかけるようにして、その後ドイツ表現主義、そしてフランツ・カフカへの道に向かうこととなった。その学恩は忘れることはできない。いずれにせよ、すでに故人となられた石井先生、成田先生、守永先生、野本先生、野田先生、そしてご健在で居られる佐藤先生にはお世話になりながら、学恩に報いることができない自分の非力に今更ながら恥じる昨今である。ただ卒論を通じて、やっと学問する事の喜びに触れる事ができ、大学で学ぶ事の素晴らしさを自覚でき、経済上の不安を抱えつつ、能力不足による苦勞も承知で、新潟大学にはまだ大学院がなかったので、とにかくどこかの大学院に進学して、それも東京で学びたいと切望することとなった。野本先生から推薦状も書いていただき、まず難関の東京大学、東京教育大学、そして立教大学を受験することにした。当時の独文の大学院はいわゆる伝統の国公立大学と有名私立大学に限られていて、受験生はかなり重複していて、試験日も集中していて、難関大学は4、5倍の倍率であって、語学力に秀でた優等生が重複して合格発表されていた。筆者はもう24歳を過ぎていたし、浪人して再受験するよりも、とにかく上京して、日本の中心で学ぶことに執着して、結局、新設されて間もないが、東大中心の教授陣を誇る立教大学大学院文学研究科ドイツ文学専攻修士課程に進学できた。担当のスタッフは共に東大文学部長と日本独文学会会長を歴任された手塚富雄教授と国松孝二教授、そして気鋭の福田宏年

教授と響田収助教授の恵まれた構成で、進学をお知らせした石井先生と星野先生からは立教は日本一の陣容ですよ、と激励していただいた。リルケの卒論で影響を受けた手塚先生からは1年間であったが、修論に向けて、最新の文献、W. Sokel のドイツ表現主義抄論の紹介を演習で与えていただいたり、また不勉強を叱咤されたりで、厳しい研究者と教育者の姿勢を実感させられたが、君は着想がよいね、ともご指摘いただいた。先生のリルケの「ドゥイノーの悲歌」の高踏な翻訳は比類なく、ヘルダーリン研究等でドイツ文学関係最初の文化勲章受賞を直前に他界されてしまったのが惜まれる。国松先生からは自分には無縁だと偏見していた語学研究の真髄や本質を教えていただき、講読演習での先生の明解な解説に啓発される事が多かった。個人的にもいろいろ激励していただき、ある時は考えてばかりいてはだめだよ、文章を書かねば、とご指摘していただいたりした。後に当方の都合で実現できなかったが、東大文学部内地研究員の件で柴田翔教授を紹介していただいたりした。また1982年度の文部省の長期在外研究員に選ばれて、その報告にお伺いして、カフカの伝記研究の第一人者、Binder 教授に指導を受けると申したら、即座に書棚から最新の Binder 教授の研究書を取り出して、しっかり前もって読んで行きなさい、とご助言していただいた。国松孝二先生は1985年に小学館から刊行された日本最高の「独和大辞典」の編集代表であられ、いずれにせよ国松先生の学究や見識の幅広さと奥深さは学会の伝説ともなっていて、家中に積まれていた膨大な蔵書は遺言として先年、一橋大学図書館に寄贈された。また誰よりも国松先生は小林秀雄の文章にも優るとも劣らない名代の文章家であられた事は忘れてはならない。ともかく筆者の立教大学での修士論文は「ドイツ表現主義文学の研究」と題して、響田先生にご指導いただくことになった。半年以上の大學紛争が急遽収拾された1969年の後期からの授業再開の中、年末から新年にかけては房総の岩井の宿に籠ったりして、集中して一気に書き上げる羽目になった。1. 序論 2. 注釈の試みーハイムとトラークルの詩の注解 3. 評価の試みーブロッホの批評の原理をめぐって、の構成で1970年1月に提出した。全国の大学を席捲していた全共闘運動の渦中での論究で、ドイツ表現主義の評価をめぐる1930年代のルカーチとブロッホによるドイツ表現主義論争に焦点を合せて、誰よりも新進の京都大学の池

田浩士講師編訳「ルカーチ・ブロッホ・ゼーガース」に恩恵を受けてまとめた論文は、不十分ながら1つの成果だと今も自負している。この修士論文は卒業論文と合せて、2003年に刊行した「カフカ、飛んだ」に第四章 ドイツ現代文学アンソロジー、1. 貧しき時代の詩人 2. ドイツ表現主義の詩人、として収録してある。

さて、筆者とカフカとの初めての出会いは1961年、高校2年の中島敦の「山月記」を教材にしていた国語の時間で、担当の早川宏先生が参考資料としてドイツの現代作家のカフカの「変身」を板書されたことを鮮明に憶えている。ただ名前と題名だけなので通例の説明事項にすぎなかったかもしれないが、カフカと「変身」がどこか奇妙にセットとなって記憶していて、それが今から50年も以前の事例となると、何か暗示的で、また多少因縁めいた出会いだった、と云えるかもしれない。ただ当時はその単なる知識以上のものではなく、実際に「変身」を読んだのは随分遅く、1967年に佐藤先生の研究発表にあわせて、それも中井正文訳の角川文庫で課外で輪読したのが最初であった。もちろん早速に魅了されたが、その読解の多様さと不可解さに今だに翻弄されている次第である。決して難解な作品ではなく、実に劇的で、魔術的で、かつ内面的で、と賛辞は尽きないが、読後には必ず何か解説しきれない緊張感と不安感に取り残されてしまう。それだけに「変身」もやはりカフカの代表作として永遠に現代人の愛読書に他ならない。1970年3月無事に大学院を修了して、幸いにも4月からドイツ語教師として長岡高専の専任教員と新潟大学工学部非常勤講師を務めることになったので、他の作品、とりわけ初期の短編「判決」、「火夫」、そして「変身」、「流刑地にて」、「掟の前で」、「カルダー鉄道の思い出」、「ブレッシャーの飛行」、「歌姫ヨゼフィーネまたは鼠の種族」等の原書を集中して読破した。更にそれらの作品が教科書版にもなっていたので、合せて教養課程の中級読本教材としても熟読することができた。正に我が意を得たり、Fischer 版と新潮社版>カフカ全集<を併用して解説に努めた修練の数年であった。研究文献も当時から量産されて、現在では膨大な数になっているが、できるだけ購入して、目を通すように努めたが、結局は諸家諸説、研究文献の洪水にさらされるよりは原書を読むに如くは無く、何よりもカフカの原文を解説するに尽きることを悟ることとなった。

2

カフカの「城」(Das Schloss)の言及は1973年からで、初出論稿は1974年に新潟大学独文関係者の研究会誌「Runen」8号に「カフカ論ノートⅠ—「城」の「第一章」—である。そして翌1975年に続稿として「カフカ論ノートⅡ—「城」の「第二章」及び「第三章」を發表した。合せてその間、1974から1975年にかけて幸いにも東北大学文学部の内地研究員として、研究テーマを「カフカの『城』の作品分析」に絞って1年間研修に当てることができた。まずはMax Brod編の1967年Fischer版で「城」の全編を対抗頁にノートを作って、一応、全二十章、457頁に注解を施し、更に主人公Kを筆頭に、登場人物別にその叙述をカードにして分類した。「城」の全編の注解とカードを分類する基礎作業に数年かかったが、後のテーマ別の論文作成に大変効果的であったのは予想以上であった。ただ当時不勉強で情報を得ることができずにいたので、底本には版を重ねていたMax Brod編集のFischer版のみしか考えられなかった。もちろん1970年代ではそれは仕方ない事でもあったが、すでに1961年以来、オックスフォード大学のMalcolm Pasley教授が中心になって、Brod批判版、カフカ全集の原典版の編集が密かに進められていたのであった。いわゆるKritische Ausgabeの編纂の事実には無知であったと云えよう。ただ、まさに不幸中の幸いとも云うべきか、後にこの批判版の最初の第1巻が1982年に刊行され、それもDas Schloß「城」であったからだ。その年の10月から文部省の長期在外研究員として、九州大学の有村隆広先生の紹介を得て、Hartmut Binder教授の指導の下で、シラーの生誕地マールバッハにあるArchiv、ドイツ文学資料館でカフカの「城」の研究に1年間従事でき、改めてこのKritische Ausgabeを底本にできる幸運に恵まれた。ただ、この幸運な在独研究の前には3つの口頭発表と3つの小論を發表していた。1973年に新潟大学独文研究会「ルーネンの会」で「エムリヒのカフカ論について」、1976年に同じく「ルーネンの会」で「カフカの『城』における形象『城』について—K. Wagenbach: Wo liegt Kafkas Schloß—をめぐって—」、そして翌1977年に金沢大学の第11回日本独文学会北陸支部研究発表会で「『城』におけるアマーリアの形姿について」を口頭発表した。3番目の「アマーリアの形姿」の発

表は前年の1976年にカフカの伝記的研究の第一人者、Binder教授が刊行した画期的大作「Kafka in neuer Sicht」に影響されて、「城」に登場する孤高な村娘アマーリアの人物像の解讀を試みたものである。この大著から説得力がある精力的な研究者のBinder教授に私淑するようになり、すでに知遇のあった有村先生からの紹介で、留学して直接指導を受ける縁に繋がったのである。3つの小論としては先の「城」の形態のモデルをめぐっての口頭発表を1976年に独文でまとめて「Ein literarischer Versuch über Kafkas Schloß I. Notiz um die Schloßgestalt」と題して長岡工業高等専門学校研究紀要12巻3/4号に掲載した。また「アマーリアの形姿について」は新たに加筆して1978年の「カフカの『城』に関する試論Ⅱ.アマーリアをめぐる覚書」と題して長岡工業高等専門学校研究紀要14巻1号に掲載した。更にカフカから影響を受けた日本の現代作家の代表に倉橋由美子が挙げられるが、とりわけ「城」のアナロジーとして「人間のいない神」、「スミヤキストQの冒険」そして「アマノン国往還記」の3作品も枚挙できるが、「人間のいない神」をカフカの「城」の受容と変奏の比較文学的視点から1980年に独文で「Ein Versuch über Franz Kafkas Schloß III — Die vergleichende literarische Bedeutung über > Gott ohne Menschen < von Yumiko Kurahashi」と題して、同じく長岡工業高等専門学校研究紀要16巻1号に掲載した。

さて、筆者の在外研究員の派遣は申請してから3度目の正直となり、1982年～1983年の期間で、何よりも1983年はカフカ生誕100年の記念すべき年で、ドイツ各地のみならず、ウィーンや南イタリアのバーリーでの記念シンポジウムにも現地で自由に参加できた。研究テーマは「フランツ・カフカの作品分析—「城」の注解—」であり、1976年に刊行されたBinder教授の「Kafka Kommentar zu den Romanen usw」にならって、「城」の各章の注解を試みる計画であった。まずはBinder先生からお世話いただいてDeutsches Literaturarchiv >ドイツ文学資料館<に常席を持ち、週1回市電で15分程のLudwigsburg PHへBinder教授の講義に通う方法を取って、自主的かつ自由な計画の下で実に機能的で安定した留学生生活を過ごすことができた。肝心の研究課題は「城」の「第一章」の詳解と全編に関連させての注解にほとんど時間がかかって、その成果をとりあえ

ず帰国した翌年、1984年に「Versuch über Franz Kafkas Schloß IV. Ein Kommentar zum ersten Kapitel」と題して Res. Rep. Nagaoka Tech. Coll, Vol. 20, No. 2, 48—90 に掲載した。ともかく当時こうした快適な在外研究の機会を与えていただいた当局に今更ながら感謝に尽きる。そして少なくともこのドイツ留学はその後の自分の人生に1つの転機となったと云っても過言ではない。

1983年8月に帰国してから11月に開催された福井大学での日本独文学会北陸支部研究発表会に「カフカの『城』の成立過程について」口演することになった。その口演内容は留学時にしたためたものでなく、折角の発表の機会とあって、帰国して急遽3ヶ月の期間で集中してまとめたものである。急いでもう1つの理由は2年後に開始することができた『カフカの「城」の覚書シリーズ』の指針となる冒頭の論文としてまとめておきたかったからである。そして1985年の4月に日本歯科大学新潟歯学部へ転出して、翌1986年に「カフカの「城」に関する試論 V、成立過程をめぐる覚書」と題して、日本歯科大学紀要（一般教育系）15号に掲載した。この論文は同紀要に2011年まで連続して発表した『覚書シリーズ』の最初の覚書となり、正しく文字通り本書の第1章を占めることとなった。以降の各章は日本歯科大学紀要が初出の試論から構成されている。

3

すでに80年を超える世界中のカフカの作品解説は多岐を極めて、いまだに迷走しているとも云えよう。そしてその最たる作品は最後の未完長編、『城』の物語に他ならない。5泊6日の城のある寒村での冬物語、自称測量技師を名乗る無宿人 K をめぐる事件がどんどん肥大化して、500頁を越えて作者カフカが放棄せざるをえなくなった大作。いずれの読者や研究者にとっても多様な理解を可能にしてくれると同時に、多様な解釈が分岐、増殖しつづけて收拾がつかなくなり、結局、いずれも不確かな言及に苛まれて、ひたすら徒労なる作業への不安感に襲われ、つまりは我意で居直るか、またしても途方にくれるしかない醜態に晒される。正にその事態こそ主人公 K の生き様そのものである。そして作品の解説のこのプロセスこそ作品の総体と表裏一体をなす意図なのだと云う他はない。いずれの解説も作品「城」の周辺を楕円軌道する作業

に過ぎなく、多くは大いなる偏見の、あるいは誤解の結末だと云うことになるのか。つまりはあらゆる解説も至難な作業であり、すべては尽きせぬ途上の作業に終始するしかないのである。他ならぬ筆者の30余年に及ぶ「城」の解説の作業も正しくこうした徒労困憊の結晶であるが、その成果に途方にくれながらも、あえて我意なる各試論を今は1冊にまとめて刊行することとした次第である。

まず総括として、カフカの「城」の全体を貫く言及可能な主題あるいは視点を順序不同に箇条してみる。

- A) 主人公 K の徒労あるいは挫折の記録。
- B) 村を支配する城は権力及び権威(ゲルマン人)の象徴で、村人は解放されない民衆(ボヘミア人)のイメージであり、異邦人 K はユダヤ人のイメージとなって、三重の民族構造が展開する物語。
- C) 城の存在は不可視、不可解そして不可避な超人的存在であり、現代の神話。
- D) 迷宮としての城、迷路としての村の構図——希望と幻滅とが錯綜する現実。
- E) 作者カフカの晩年の恋愛(婚約解消等)と病苦そして執筆意欲から生ずる葛藤と反意との二律背反。
- F) 可変性と断絶(中断)とが混在する人生。
- G) 自由に労働者として生きる権利を主張しつづける K の人間としての主張。
- H) 東欧ユダヤ人の運命。
- I) カフカの人生の総決算『地上的なるものの最後の限界への突進——文学のすべては限界への突進』。
- J) 孤独な男の飽きなく自立をめざす自己探求と自己省察の記録。
- K) 現代のピカレスク(悪漢)物語。
- L) 「ドン・キホーテ」の現代的アレゴリー（長編寓話）。
- M) 「ファウスト」の現代的アレゴリー（長編寓話）。

まだまだ幾多の主題を枚挙できよう。正しく百家百論とも云える。これこそがカフカ文学の本分に違いない。ただ大方は作者カフカにとっては反意なる解釈なのかもしれない。後世の読者による勝手な解釈で生き恥をさらす羽目を恐れて、友人 Brod に全ての遺稿の焼却を願い出たはずである。また、増大する解釈もやがては官庁の書類の山のようになって、ついには放置

される運命をたどらないとも限らない。正しく大作「城」の解説は執筆の結末と重ね合わせることができよう。そしてこの「城」が永遠に放置されずに、仮に中断されても、更に書きつづけられて、カフカがブロートに語ったと云う、主人公 K の臨終に城から村での滞在許可の知らせが届くと云う、いわゆるファウストの救済の如く、神の恩寵が結末となると、解釈が一気にメシア待望論やシオニズム、そしてユーデントゥームに限定されてしまう。これもまた作者カフカの本意ではないにちがいない。やはり多様な解釈の可能性のまま放任されるのが定めとするがよいのだろうか。何よりも正しい解釈や間違った解釈の成立しない、熟読すればするほど、また再読すれば必ずと云ってよいほど新たな発見や解釈が生まれ、一層の読解の自由が深まることこそカフカの最大の魅力にちがいない。とは云え本書は残念ながら新たな解説を道を拓く論稿にはならなかった。長年を要したが、能力的な限界からも大作「城」の注解の1つの試みにすぎないことをまず白状しておきたい。正しく主要な登場人物を中心に、全編にわたってその形姿を注解した小論集にすぎない。

4

カフカは晩年の手記で生涯かけて執筆すること、すなわち文学に関して2つの箴言を残している。1つは「書くことは祈りの形式」であり、もう1つは「文学は限界への突進」である。両方とも未完の大作「城」への執筆の心情が最も的確に表現されている言葉と云ってよいだろう。そして正に遺言とも云えるこの2つの告白は死後に恥をさらさぬように、「城」を含めた、すべての遺作を焼却するよう、畏友ブロートに依頼した心情と表裏一体をなしているのだ。そこには病魔と創作の狭間に込められた切実な意欲が秘められてされている。その意味で未完の大作「城」は思い半ばで果てたカフカの人生と作品の集大成に他ならない。

本稿は来春刊行予定の「限界への突進—カフカの「城」—」(仮題)の前書と後書のための覚書である。